発行：福生市生活環境部
協働推進課

❖男女共同参画情報誌❖

あなたとわたし

vol.40
2012.10月号

手をつなぎ　足もとしっかり　良い社会

子育てママに好評！

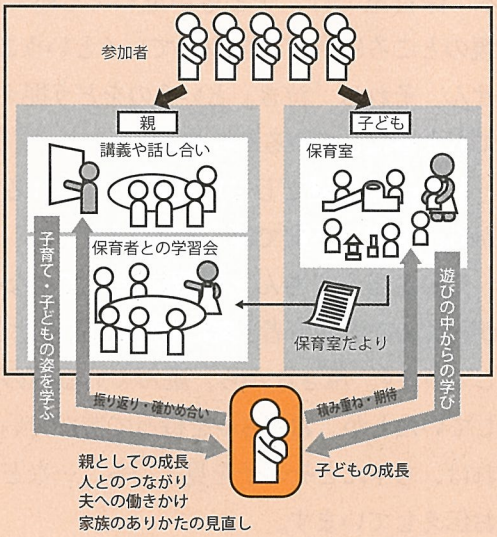
公民館の保育室併設講座

ママも子どもも輝いて ワークライフバランスを目指す その2

前号（Vol.39）に引き続き、福生市の公民館で長年実施し、好評をいただいている「保育室併設講座」について掲載します。
今号は、子どもたちの保育を受け持つ保育者にインタビューしました。預かるだけの保育ではない、子どもの成長に寄り添った保育の様子と、母親が子育てを捉え直すきっかけにもなっている学習会や保育室だよりについて伺いました。

保育室併設講座とは

子どもは母親と離れ、仲間とのかかわりを通して自立心や社会性を習得します。その手助けを公民館保育者は「子どもにとって」という視点を大切に、保育を通して行います。母親は子どもと離れ、講座のテーマを講師の講義や話し合いなどにより学びあいます。また、保育者を交えての学習会では、保育室での子ども達の様子を通して、子育てや暮らし全般について話し合いを行っています。（右図参照）
親も子もそれぞれの時間を過ごすなかで成長し、参加者同士のつながりから新たな気づきがあったり、親子関係を振り返ったり、さらには夫とどのように子育てや家族作りをしていくかなど、ワークライフバランスの考え方や家庭生活の見直しに役立っているようです。



目の不自由な方への情報ツールとして開発された二次元シンボル「ＳＰコード」を掲載しています。専用の読み取り装置を使って、**今号の内容を要約した文字情報**を音声で聞くことが出来ます。専用の読み取り装置は市内の公共施設９か所に設置しています。くわしくは協働推進課へお問合せください。

講座の保育者のお二人にお話を伺いました。
佐々木さん…福生市在住。保育士
田中さん…福生市在住。保育士
聞き手：
市編…市民編集員／数名
（市民編集員の中にはこの講座の受講経験者がいます。）

保育室併設講座の保育室の考え方

佐々木：保育室は、子どもにとって母親を待つ場所ではなく、子ども同士で自分の気持ちを出し、人との関係をつくる成長の場なのだという考え方をしています。「関係を切り結ぶ」と言った公民館職員もいました。一時離れると子どもは泣いて母親を待っているけれど、そのうちだんだん保育室が自分の居場所だとわかってくる。母親を待つ自分ではなく、自分が楽しく過ごす場所に変わっていきます。また母親も学習したいがために、子どもを預かってもらうという意識から、この子が保育室でどう過ごせば楽しいのかなと考えていけるようになる。私たちが大事にしていることの柱になっている部分です。

田中：私たちはお母さんたちを支える、地域の人でありたいとすごく思いますし、みなさんの学習を支える保育者でありたいと思っています。

こどもの「泣き」を捉えなおす

佐々木：保育室では、子どもが泣いても叫んでも、母親のところに子どもを連れていくということはしません。それは「泣き」というのをどう捉えるかをとても大事にしているからです。

毎日一緒に過ごしていた親子が離れるわけですから、最初は不安で泣くと思います。

その泣きをきちんと母親に伝えて、なぜこの子が泣くのかを保育者と共に考えることをとても大事にしています。泣きながら、遊んでいる他の子を気にしていたとか、おもちゃを持って遊んでいる子がいれば、ちゃんとその子を見ている。…などを母親にお伝えしています。

それと、お子さんと別れる時に「ちょっと行ってくるから、待っていてね」と言うのではなく、「お母さんは別な部屋でお勉強しているよ」と、子どもに伝えるようにお話しています。「お母さんは、今、別の部屋で勉強しているよね、時計の針が重なったらお迎えにくるよ」と母親が言っていることと保育者が言っていることがきちんと重なるようにしています。そこがとても大事だと思うのです。2時間泣いていても、母親が迎えに来た時に「ただいま」と子どもに声をかけると、“お母さんはどこかに行っていたのではなく、この館の中のどこかにいたのだ”と、年齢が低いとすぐには理解できなくても、回数を重ねればだんだん理解してきます。初めて離れる母親にすれば、きちんと話せば話すほど、子どもが泣き叫んで、別れる時に辛いようです。「ちょっとトイレ行ってくるからね」などとごまかした方が、子どもは泣かずに「行ってらっしゃい」ができますが、結局なかなか帰ってこない親への不信感が、かえって子どもを不安にしてしまうのです。嘘ではない、きちんとしたことを伝えることが、子どもとしての人格を大事にすることにつながります。

田中：日常では子どもに泣かれると、ご近所迷惑になったり、なんで泣かしているのかという社会の目もあるので、飴をあげたりしてごまかしたりしますよね。保育室では子どもたちは、泣きながらも気持ちを整理し、まわりの子どもたちとどうすれば一緒に楽しく遊べるのか、考える力を獲得していきます。またお母さんとの約束がきちんと守られる経験をして、人は安心し信用していいのだという、母親と子どもの新たな結びつきにもなっていきます。泣いていた子が、晴れ晴れとした顔で、「いっぱい遊んできたよ」と走り寄って来た時に「わが子は世界一かわいい！」と胸に刻みつけて、そのいとおしさをより深めて欲しいと思います。

「預けること＝罪」という意識

市編：参加者からは、「預けてまで講座に参加しなくても」と言っていた夫が、楽しい時間を過ごしていることに気づくに従って、「参加してよかったね」に変わってきたという話も聞きました。

佐々木：結婚し、子どもを出産した後、女性は一時、すごく孤独を感じるというか、社会に出ることもなく子育てをし、毎日毎日子どもとだけ接して、なんか満たされない気持ちになることってありますよね。

保育室併設講座に子どもを預けながら参加してみると、今できなくても、5年先、10年先に何かやってみようかなと、ひとつ光がみえてくるのです。この講座は継続講座なので、泣いていた子が心を開き、仲間を求めていく姿と、母親達が自分の生き方を考えるのが、ぴったり重なるのです。「あのお母さん、変わってきたけど、子どもも変わってきたね」ということがよくあるのです。

市編：講座の回数は大事でしょうか。

佐々木：子どもが泣くことから楽しむことができるようになる、そういった乗り越える力を獲得するには、ある程度時間がかかりますね。1回や2回で「はい変わります」ということではないです。気持ちの問題なので、そこを丁寧にやっていくと「変わってきたね」と実感できますから、ある程度の回数は必要だと思います。

市編：前号で出たお話の中に、子どもを預けることへの罪悪感を持つ親が多いとありましたが、当事者の子どもはどういう気持ちなのでしょうか。

田中：子どもにとって母親は弁護してくれる人であり、問題解決をしてくれると同時に、指示する人でもあります。例えば「仲良くしなさい」「おもちゃをとり合っちゃだめよ」ということをいつも言われていると、子どもは良い子でないといけないと思いがちになります。ところがお母さんと離れて保育室に入ると、自分で考え、自分で選び、自分で行動しないと何も始まらない。泣き続けても、ちっとも楽しくないと気づき、まわりの子どもが遊んでいるのを見て、自分で泣くのをやめて遊び始めます。そのうちに、子ども同士関わることで、他の子に遊んでいるおもちゃを貸せない自分に気づいたり、あるいは他の子と一緒に遊ぶ方法を見つけたりしていきます。

子どもたちは、お母さんと一緒にいる時とお母さんと離れて保育室にいる時とで、違う姿をみせることもあります。やがてお母さんが言うとおりに行動する子から、自分の力で考えて行動できる手応えを子ども自身が感じてきます。

佐々木：母親は、我が子はまだ小さいから、私でなければ…という思いがすごくあると思います。でもこの講座を通して、子どもは、母親から離れても自分の世界を作っていけるし、預けられるかわいそうな子じゃないと気づきます。そして、親もこの子にはこの子の世界があるんだと、認めることが出来るようになります。いつまでたっても私でなきゃだめなのだと思っている方も中にはいらっしゃいますから、子どもと距離を取って見られることって、とっても大事だと思います。

叩いたり噛みつくのは悪い子？

田中：社会通念上、叩いたり、噛みついたり、おもちゃをとったりするのは、悪い子、困った子となっています。「うちの子乱暴ですから、よく見張ってください」とおっしゃったりするのですが、そういう子は、やり方がわからないだけで、一緒に遊びたい意思表示だったり、興味があるという意思を、おもちゃをとるという行為で表しているだけなのです。その子にとっては、あの子の持っている物が面白そうだとか、あの子が遊んでいることがすごく楽しそうだという、“あの子”という存在に気づけることが大事なのです。保育室では叩いたり、噛みついたり、おもちゃをとったりするやり方だと、一緒に楽しく遊べないという経験をすることが大事だと思っています。そうした子ども同士の関わりを支えていくのが保育だと

目の不自由な方への情報ツールとして開発された二次元シンボル「ＳＰコード」を掲載しています。専用の読み取り装置を使って、**今号の内容を要約字情報**を音声で聞くことが出来ます。専用の読み取り装置は市内の公共施設９か所に設置しています。くわしくは協働推進課へお問合せください。

私たちは思っています。

保育室だよりの中にも実際に起こったことをありのままに実名で出しています。保育室だよりは、保育者同士で十分に話し合って発行するようにしています。噛んだり叩いたりする行為をそのまま子ども自身から出た気持ちの表れとして載せ、お母さんにも感じとってもらいたいと思っています。

講座では学習会がありますが、保育室だよりをもとに何を伝えたくてそのことを載せたか、保育室では何を大事に捉えているかを、話し合うようにしています。

佐々木：お母さん同士で子どもを見ている時には、自分の子どもが隣の子どもを叩いたりすると、「謝りなさい」と叱り、なんで叩いたかには目を向けず、耳をかさず、ただただ謝らせたりすることが、普通にありますよね。親同士がトラブルを起こさないために、私が気まずくなるから謝っちゃいなさい—というのは、その子にとっては合点がいかない、納得が出来ないことです。そういうことで子どもが育っていくでしょうか？子どもは所有物ではないですよね。

学習会を通して、お母さん達は保育観、子育て観を転換するきっかけになっているようです。

なぜ、この子はこういうことをするのか？という部分をとりあげ、その子の本来の姿を受け止め理解していきます。

田中：保育室だよりでは、その子どものことを大事にするためには、AちゃんBちゃんというのではなくて、一人の人格として、認め合うことが大事だと思っていますので、実名を出すようにしています。子どもは自ら悪い子とは、自分のことを思っているわけじゃない。実はそう思わせられている。そういった社会をもう一回捉えなおすことによって、もっと生きやすく、育てやすい環境というのを考えてほしいですね。

もめごとを嫌う人間関係

佐々木：親子の関係も、人と人との関係も築けない、それが今の社会の問題になっているところがあると思います。好きで結婚した夫が、私のことをどう思っているのか、子どものことをどう思っているのか、直接話し合えばいいのに、自分が思っていたイメージと違う夫を見ることになるかもしれないし、私の事を非難するかもしれない、そこを乗り越えるのをすごく怖がっている。だからもめごとは起こさない。傷つけあったりしたことがないので、傷つくということが分からない。

田中：問題をそのままにしていては、解決する喜びも知らないままですよね。深く結び合える喜びを知らないまま、そっと暮らしているように思います。

佐々木：子どもは、おもちゃを取り合う中から、「○○ちゃんは今は貸したくないんだね、もう少ししたら貸してね」って言える関係が育つのと同じだと思うのです。嫌なことは嫌だと言ったり、なぜ嫌なのって聞かれてみたり、そういう関係が深くなれば、より良い夫婦関係ができると思います。家庭の中で話合うこと、もめることが、時には次へのかけ橋、ステップになるのだということを子どもが示してくれるのですよね。大人の私たちが、反省することもあります。

前号と今号にわたり「保育室併設講座」を取り上げ、参加者と保育者からお話を伺いました。講座に参加された方の中でその後、PTAや地域でいきいきと活躍されているというお話も伺いました。講座での経験や学びが参加者を通してさらに地域で新しいつながりを生み、実を結んでいます。子育て中はいろいろとある時期だけに家族の問題が浮かび上がることもあるようです。そんな時だからこそ学ぶ機会を捉え、家族のあり方を見直すワークライフバランスへのチャンスと言えそうです。

広告を募集しています！ 次号は10月発行予定です(全戸配布)

「あなたとわたし」に掲載する広告を募集しています。
【規格】 4.5センチ×9センチ。各号2枠
【広告料】 1枠：15,000円
※申込み用紙は市のホームページからダウンロードできます。内容により広告掲載できない場合がありますので、詳しくはお問い合わせください。
【問合せ】福生市生活環境部協働推進課　TEL 551-1590

市民編集員　○輿水和代　○寺﨑敏枝　○濱原幸恵

企画編集　NPO法人 NAFA子育て環境支援センター

あなたとわたし vol.40　2012年10月号
発行：福生市 生活環境部 協働推進課
〒197-8501 東京都福生市本町5番地　電話 042-551-1590
http://www.city.fussa.tokyo.jp/